

古典の中の人とからだ (2)

——創世記の中から——

平 沢 彌一郎・臼 井 永 男

Man and Body Described in the Classics (2) ——*Man and body described in the Genesis*——

Yaichiro HIRASAWA and Nagao USUI

ABSTRACT

An observation was done on the basis of the general conception of the interrelating function of a human body and soul stated in Genesis, the first book of the Bible. According to the Old Testament, people in Israel have a notion that function of a whole is dependent upon that of a single portion of it. So the function of a whole human body must be determined in accordance with the quality of function of every organ or part of a human body, such as blood, bones, internal organs, brain, hands, feet, face, mouth and ears. As to a human body, it is regarded, with not many exceptions, as a perfect physical realization of soul, which is supposed to have no material reality. Thus they believe in soul as a vital part of a human body, in other words, human life. Human being, after all, is physical realization of human life.

Being an essential part of human life, attention should be paid to the spiritual side of function of parts as well as physical side in studying human body.

אֱלֹהִים	יְהוָה	וַיֵּצֵר	27
(神は)	(ヤハウェ)	(そして創造された)	
מִן־הָאֲדָמָה	עָפָר	אֶת־הָאָדָם	
(その土地から)	(塵)	(その人を)	
חַיִּים	נְשָׁמָה	בְּאַפִּי	וַיִּפֹּחַ
(生命の)	(息を)	(彼の鼻の中に)	(吹き込んだ)
: חַיָּה	לְנֶפֶשׁ	הָאָדָם	וַיְהִי
(生きた魂の)	(ひとりの人となつた)		

ヤハウェ神は地の塵から人を造り、かれの鼻に生命を吹き込んだ。するとその人は生きた魂の人となった。(私訳)

I. はじめに

「創世記」という名称は旧約聖書のヘブライ語原典の最も古い翻訳であるギリシャ訳につけられた Γένεσις ないし Γενέσις κόσμου (世界の成立) から由来する。

創世記は、旧約聖書の開巻第一の書である。また、モーセ五書の最初の書であって、ヘブル語聖書においては、五書の他の書の場合と同様に、その本文の最初の語をとって בְּרֵאשִׁית (b'rē'shît) [はじめに] という表題になっている。英語の Genesis という表題は、七十人訳によったもので、「創造」の意味に用いられている。日本語の「創世記」は漢訳聖書によったものである。ドイツ語聖書は die Genesis (das I. Buch Moses) 「モーセの第一書」とも呼ばれることがある。

「人」という語 [ヘブライ語 אָדָם ('ādām), אִישׁ ('iš), עֲנוֹשׁ ('enōš), גִּבּוֹר (gebeer), ギリシャ語 ἄνθρωπος, ἀνὴρ] は、一般に「人類」あるいは「人間性」をさし、また個人についても用いられている。この語が教理的用語となったのは、主として「人類」、「人間」(mankind) の意味においてである。

聖書が人間について明確な科学 (=人類学 anthropology) をもっているか否かについては、全体として否定的な答えがなされる。これは、聖書的思想 (旧約聖書と新約聖書) の表現が、それぞれの時期における当時の科学思想を媒介とし、これを宗教の本質を伝える手段としたことを意味している。しかし、この「人」の教理の発展の最後の段階でさえも、もっとも初期のものに支配されているが、結局は甚だしく矛盾した教理を示してはいないから、少なくとも総体的に統一をもっているといえることができるであろう。

「人」の起源については、聖書には「人」を神の創造物とする 2 種類の記述がある。その一つは、冒頭にかかげた 2₇ である。もう一つは 1₂₇ 「そこで、神は人を御自分の像(かたち)通りに創造された。」である。

前者は「人」をヤハウエ資料による特殊的形成で、後者は祭司資料による普遍的形式でそれぞれ表現している。

すなわちヤハウエ資料では、神は地の「塵」から人を造って生命の息を吹き込んだとある。祭司資料では、神と人を世界の一部として創造したとある。この両記述はその表現をそれぞれ異にしているけれども、それらが教えようとしている本質的な真理は、「人」の存在が全く神に依存し、また神と精神的近似性をもっているということである。人間がいかにして存在するに至ったかという生物学的な進化過程は、自然科学によって説明されるべきもので、それは聖書的な人間理にとっては二次的なものである。

人間創造に関する聖書の記述は、「人」が神の像(かたち)を賦与されていることを含んでいる。このことは、神が肉体的な像をもち、「人」はそれにかたどってつくられたことを意味するとか、あるいは「神の像」とは、「人」の道徳性を表わしたものであるとか、または単に他の生物の上に支配権をもつという意味にすぎないかも知れないとか、さまざまな説明がなされている。しかし、これらの説明はいずれも満足な見解であるとは言えない。

しかし、聖書に「神に似せて創造り」(創世 5₁)、「神はその像(かたち)通りに人を創造られた」(同 9₆)、「創造られたお方(神)の像(かたち)に肖って新しくされた」(コロ 3₁₀)、「神に像って創造られた人間」(ヤコ 3₉)などの表現がしばしば反復引用されていることは、これを単なる修辭学的修飾として退けることはできない。神の像(かたち)は、「人」を神と関係づけさせるもの、言い換えるならば、その人格(ただ少しく「人」を天使たちよりも少し低くつくり、光栄と尊きを人にこうむらせ、人をしてあなたのみ今の業を支配させ、その足もとに総てのものを置かれた:詩 8_{6,7} 関根訳)であるとするならばいっそうよく理解される。筆者らは神は人の「からだ」を創造されたのではなく、神は「人」を創造されたという見解に立つ。

つぎに、旧約聖書の中における「からだ」について考察してみよう。新約聖書の中における「からだ」は、「肉」(*σάρξ*)に対する *σῶμα* である。口語訳聖書(聖書協会)で「からだ」と訳されているヘブル語は 10 [בֶּטֶן (beten), בָּשָׂר (bāsār), גִּפְּיָה (gēwiyāh), גִּפְּהָה (gūphah), גֶּשֶׁם (geshem), יֶצְרִים (yetsurīm), מַעִים (mē'im), עֵתִין ('etīn), עֵצֶם ('etsem), שְׁעָרִי (she'ēr)] あるが、それらのうち内容的にみてもっとも重要な語は בָּשָׂר (bāsār) である。ところが、בָּשָׂר はもともと「肉」を意味し、ギリシャ語では *σάρξ* とすべき語である(創世 2₂₃, 申命 12₁₅ ほか)。260 箇所をこえる בָּשָׂר のうち、口語訳(聖書協会)で「からだ」と訳されているところはきわめて少ない。旧約聖書は、新約聖書のように、肉」と「からだ」とを二つの語によって区別することをしない。旧約聖書では、「からだ」は、ある独立した概念をつくりえない傾向をもつように思われる。

旧約聖書では、「魂」と「からだ」の区別がないわけではない(イザヤ 10₁₈ 他)。しかし、「からだ」は「魂」の完全な表現である(Joh. Pedersen, *Israel-It's life and culture*, 1-2, 1926, p.171)。イスラエルの人々にとって、全体はつねに個々の働きによって動くから、「魂」の活動にあずかる「からだ」の個々の部分や器官は、「魂」そのものである。心も血も骨も内臓も頭も手も足も口も顔も、「からだ」の一部分でありながら、「からだ」そのものとして機能し、「魂」そのものとして働く。すなわち、各部分が一つの命 [נֶפֶשׁ (nepeš)] であり、一人の「人」を表現する。

以上は、聖書の中に記されている「人」と「からだ」についての概要である。今回は、創世記の中において「からだ」の各部分とその「人」の命の担い手としてどのように使われているかを調べた。

「創世記」は 50 章より成っているが、1 章から 11 章までと、12 章以下との間には大きな句切りがある。

最初の 11 章では、天地万物と人間の創造から始まり、ノアの洪水の後、バベルの塔までの事件を記す。この部分は、いわばイスラエルの神話時代であり、人類の始原史であり、人間そのものが主題になっている。

11 章以下は、アブラハム(12~25 章)、イサク(25~28 章)、ヤコブ(28~36 章)、ヨセフ(37~50 章)という 4 人の人物を中心に歴史が綴られていて、族長時代と呼ばれる。これはイスラエルの伝説時代、先史時代といってよい。

ところでこの「イスラエル」という語であるが、原語では「神支配し給う」あるいは「神の支配」という意味を持っている。

十戒を中心に契約を結んで成立した誓約共同体が、イスラエルと名づけられたのであり、それがイスラエルの起源である。

よって創世記ではまだ、イスラエル民族になっていない。

出エジプトを経験して、十戒による神との誓約をした人たちが、これからイスラエルとして歴史を担って歩み出すのである。そこからイスラエルが成立したのであり、彼らは同じ信仰の者同士としか結婚しないので、イスラエル民族が起こったのである。

さて、関根正雄訳「創世記」(岩波文庫)から、人のからだに関する用語を拾い出してみた。使用されている用語は大きく三つに分類された。即ち、

1. 身体各部位の用語
2. 「人体」を意味する用語
3. 男と女に関する用語

以下、順次使用されている箇所を示すとともに、その使われ方について検討を加える。

II. 身体各部位の用語

26 種類の用語がのべ 262 回に渡って使用されていた。

頭 あたま רֹשׁ (rōš), κεφαλῇ, Head (17 回)

23₇ 23₁₂ 37₁₀ 40₁₃ 40₁₆ 40₁₇ 40₁₉ 40₂₀ 43₂₈ 48₁₂ 48₁₄ 48₁₄ 48₁₇ 48₁₇
48₁₈ 49₂₆ 49₂₆

顔 かお פָּנִים (pānīm), πρόσωπον, Face (33 回)

3₈ 3₁₉ 4₅ 4₆ 4₇ 4₁₄ 4₁₆ 9₂₃ 24₆₅ 29₁₇ 31₂ 31₅ 32₂₁ 32₃₁ 32₃₁
32₃₁ 33₁₀ 33₁₀ 35₇ 38₁₅ 39₆ 40₆ 40₇ 42₁ 42₆ 43₃ 43₅ 43₃₁ 44₂₃ 44₂₆
46₃₀ 48₁₀ 50₁

眼 め עֵינַי ('ayin), ὀφθαλμός, Eye (32 回)

3₅ 3₆ 3₇ 13₁₀ 13₁₄ 13₁₅ 18₂ 19₁₁ 20₁₆ 21₁₉ 22₄ 22₁₃ 23₁₁ 24₆₃ 24₆₄
27₁₂ 29₁₇ 31₁₀ 31₄₃ 33₁ 35₅ 37₂₅ 39₇ 41₃₇ 42₂₄ 43₂₉ 45₁₂ 46₄ 48₁₀ 49₁₂

耳 みみ אוָז ('ōzen), ὠς, Ear (4 回)

4₂₃ 20₈ 35₄ 44₁₈

鼻 はな אֶפְסָיִם (āppayim), Nose (4 回)

2₇ 7₂₂ 24₂₂ 24₄₇

歯 は שֵׁן (shēn), ὀδούς, Tooth (1 回)

49₁₂

頸 くび עֲרֵף ('ōreph), κεφαλῇ, Neck (9 回)

27₁₆ 27₄₀ 33₄ 41₄₂ 45₁₄ 45₁₄ 46₂₉ 46₂₉ 49₈

肩 かた קָטֵף (kāṭēp), ὤμος, Shoulder (5 回)

9₂₃ 21₁₄ 24₁₅ 24₄₅ 49₁₅

29₁₄

乳 ちち כָּלָב (chālāb), γάλα, Milk (1回)

49₁₂

「手」が最も多く使用されており(87回)、次いで「顔」(33回)、「眼」(32回)の順である。旧約聖書における「手」の引用頻度の高さは、第一報に述べた通りである。

第一報で扱った詩篇に使用されている「からだ」の各部に関する名称の種類とその数にはとても及ばず、創世記においてはきわめておおざっぱなとらえ方をしている。

詩篇で非常に使用頻度の高かった「口」はここでは一度も使われていない。

「腰」、「腹」、「胎」はいずれも、子を宿すところとして使われている。

「腿」と「もも」および、「脚」と「足」がほとんど同じような意味を持たせて使用されている。

11章までのイスラエルの神話時代の記事の中には、これらからだの各部の名称が使われる頻度は非常に低い。

即ち、「顔」8回、「腿」3回、「耳」1回、「鼻」2回、「肩」1回、「手」4回、「血」5回、「肉」18回、「骨」4回である。

ここで「血」は8回中5回、「肉」は19回中18回、「骨」は5回中4回が、神話時代の記事において使用されていることがわかる。人間の創造の記事は、からだの名称ではこの「血」「肉」「骨」を中心にして、次項Ⅲに述べる神の像(かたち)に「人」を創られたのである。

血 Blood のヘブル語 דָּם (dām) は「赤銅色の地面、大地」を意味する דָּמָה ('dāmāh) と関係のある言葉である。

9₄に、「肉を、その生命(すなわち血)のままで食べてはならない」とある。つまり血は「生命の主」である神に属しているので、人間が勝手に血を流してはいけないという信仰からである。したがって流血が認められる場合にも、何らかの宗儀的な了解が前提となっている。

[実にほとんどすべての宗教において、血を生命及び生命力の宿るところとしている]

特に人間の流血が厳禁されているのも「神は自分の像(かたち)の通りに人をお創りになったから」である。

人の血を流す者に対しては、神は必ず報復する(創世4₁₉、9₅、I王2₁₉)と断言している。ダビデが報復しようとして、剣をもって出かけたとき、アビガルが彼をとどめてかえって賞賛されたのも、そうした理解を示すものである(Iサム25₂₃—)。

「肉」のヘブル語は בָּשָׂר (bāśār) である。これは「からだ」とも訳されているが、本来は肉体を意味する。関根訳創世記には「からだ」なる語が一度も使用されていない。

動物の肉、人の肉、あるいは動物または人の総称として使われるほか、血縁の意味でも使用される。

「わが肉から取られた肉だ」(2₂₃)

「それゆえ男はその父母を離れて、妻に結び付き、一つの肉となるのである」(2₂₄)

「骨」は、五体を構成する強力な粹であり、力の概念を表現するのに使用された。

神は、人の肋骨の一つを取って、その場所を肉でふさがれた(2₂₁)。人から採った肋骨を一人の女に創り上げられたとき、人は「ついにこれこそわが骨から取られた骨、わが肉から取られた肉だ」と叫んだ(2₂₃)。

これとほとんど同じように「君は本当にわたしの骨肉だ」とヤコブに対して、ラバンが言っている(29₁₄)。これは形容的に近親関係をさしている。このように親近感を強調するために、この血縁紐帯の語「骨肉」が好んで用いられた。

骨はまた遺骨、遺体をさしても用いられた(創世 50₂₅, 民数 19_{16,18}, ヨシ 24₃₂, IIサム 21_{12,13}, エゼ 37₁, アモ 6₁₀, マタ 23₂₇, ヘブ 11₂₂)。

III. 「人体」を意味する用語

7種類の用語が、のべ92回使用されていた。

像 かたち צֶלֶם (šelem), $\epsilon\lambda\acute{\iota}\kappa\acute{\omega}\nu$, Image (4回)

1₂₆ 1₂₇ 5₃ 9₆

生きもの חַיָּה (hayyāh), $\xi\acute{\omega}\rho\omicron\nu$, Living creature (14回)

1₂₀ 1₃₀ 2₇ 6₁₇ 7₁₅ 7₂₂ 7₂₃ 8₁₇ 8₂₁ 9₅ 9₁₀ 9₁₂ 9₁₅ 9₁₆

人 ひと אָדָם ('ādām), $\alpha\nu\theta\rho\omega\pi\omicron\varsigma$, Mankind (59回)

1₂₆ 1₂₇ 2₅ 2₇ 2₇ 2₈ 2₁₅ 2₁₆ 2₁₈ 2₁₉ 2₁₉ 2₁₉ 2₂₀ 2₂₀ 2₂₁
2₂₂ 2₂₂ 2₂₃ 2₂₅ 3₈ 3₉ 3₁₇ 3₂₀ 3₂₁ 3₂₂ 3₂₃ 3₂₄ 4₁ 4₂₃ 4₂₆
5₂ 6₁ 6₂ 6₃ 6₃ 6₄ 6₅ 6₆ 6₇ 6₈ 7₂₁ 7₂₃ 8₂₁ 8₂₁ 9₅ 9₅
9₅ 9₆ 9₆ 9₆ 14₂₁ 16₁₂ 16₁₂ 24₂₆ 24₆₀ 26₂₂ 27₁₁ 32₂₅ 32₂₉

身 み $\sigma\acute{\omega}\mu\alpha$ (12回)

3₁₀ 4₁₄ 16₉ 18₂ 24₂₆ 24₄₈ 28₁₁ 33₃ 35₂ 42₃₆ 42₃₈ 43₁₄

身体 しんたい $\sigma\acute{\omega}\mu\alpha$ (1回)

47₁₈

全身 ぜんしん (1回)

25₂₅

身震い みぶるい (1回)

27₃₃

「ひと」は、神の「かたち」に創造された。この「かたち」は、「形」,「Image」であるが、関根は、「像」をかたちと読ませている。

数種のヘブル語が「かたち」と訳されている (figure II代 4₃, イザ 44₁₃, appearance エゼ 1_{16,27}, form エゼ 1₅)。しかし特に意味深いのは צֶלֶם (šelem) で神のかたちについて用いられている (創世 1_{26,27})。

人類はその創造の際に、神のかたちに創造されたといい、これは人間の生命の尊厳性の根拠とされた（創世 9₆）。この記述から神学上重要な「神のかたち」(image Dei) の教理が発展した。

これは肉体的形態の類似ではなく、理性を自由と善悪を判別する能力との賜物をさしているので、この精神が人間を他の動物から区別するものであるとする。

しかし人類は罪を犯したために、その本性は神の恵みによって再びこのかたちに回復される必要があるのである（エペ 4₂₄、コロ 3₁₀）。

更に、神のかたちを造ることの禁止について תְּמוּנָה (t^emûnāh) が用いられている (likeness 出エ 20₄、申命 5₈)。

申命記は神のかたちの不可視性を強調しているが (form 4_{12,15,23,25}) ただ一か所だけモーセと神の神交を表現するためにこの語が用いられ、「彼はまた主の形を見るのである」と記されている（民数 12₈）。

ところで創世記には 25 名についてそれぞれの寿命が明記されている。アダムの寿命は 930 歳であった。ノアの洪水前の人は非常に高齢であった。メトシェラは 969 歳で最高齢、エノクが 365 歳で最も低年齢である。寿命が明記されている 10 名中 7 名までが 900 歳を越えている。

しかし人の悪の増大を嘆き、神はついに人の寿命を 120 歳に決められた (6₃)。人のからだの耐用年数が、現代の医学的な裏づけから推測しても、この数字から大きくはずれていないように聞いている。

ノアが 950 歳まで生き、その子セムは 600 歳で、以後徐々に短命になっていくが、創世記最後のヨセフは最も短く、110 歳で死に、ミイラにされて棺におさめられている。しかし 110 年というのはエジプト人の考え得る最長年齢であったらしい。

寿命が明記されている 25 名の各々の年齢は表 1 に示すとおりである。

表 1. 創世記における人の寿命

氏 名	年 齢	氏 名	年 齢
アダム	930	エベル	464
セム	920	ベレグ	239
エノス	905	レウ	239
カイナン	910	セルグ	230
マハレル	895	ナホル	148
イエレド	962	テラ	205
エノク	365	アブラハム	175
メトシェラ	969	イシマエル	137
レメク	777	イサク	180
ノア	950	ヤコブ	147
セム	600	ヨセフ	110
アルパクシャド	438	サラ	127
シェラ	433		

古代のイスラエル人は、人の命についてどのような意識を持っていたのであろうか。

旧約聖書において「いのち」は生ける神という概念と結び付いている。イスラエルの神は、生きて歴史の中に動く神であった(ヨシ 3₁₀)。異教の神々は、決してこれと同じ意味で生ける神ではない(申命 32_{39,40})。

ヤハウェは死んではよみがえる密儀教の神とは異なって、常に生ける神である。

神が生物から息を取り去ると、それは死んでちりにかえる(詩篇 104₂₉)。死とは生けるヤハウェの神から絶縁された状態である(詩篇 88₄₋₅)。それは陰のような空虚な領域である。イスラエルはそれゆえ、死を美化しなかった。

死は、生ける神とのかかわりを中心とするイスラエルにとっては、少しも積極的な意味を持たない。彼らは、「わたしは命と死及び祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは、命を選ばなければならない」(申命 30₁₉)という神の命令の前に立つ民である。

חַיִּים (hayyîm) は抽象名詞、強調の複数形である(申命 28₆₆、イザ 38₁₂他)。口語聖書は動詞形にして「生きている」(IIサム 15₂₁、エゼ 7₁₃他)と訳されたり、「一生」(創世 23₁、出エ 6₁₆他)と訳されている場合が多い。

חָיָה (hāyāh) という動詞形も、「命を保つ、全うする」の意味に使われる(創世 20₇、申命 4₂他)。

形容詞の חַי (hay) (詩篇 42₈他) という形も少なからず用いられている。

חַיִּים は、地上の生涯、一生、死に対していう生という意味がある。「……は生きています」とか、「あなたのいのちにかけて」は誓いを立てる時の表現形式としてよく用いられる(Iサム 1₂₆、17₅₅他)。

נֶפֶשׁ (nepeš) は、名詞単独でも(創世 9_{4,5}、19₁₇、37₂₁、出エ 4₁₉、箴言 2₁₉、3₂他)きわめて多く用いられている言葉である。この語は、人間あるいはグループの体、肉体 [בָּשָׂר (bāšār)] の中に離れ難く宿って、これを形成し、指向させ、活動させる生命である。

これは肉体と分離、独立して存在する靈魂ではなくて、生命そのもの、そのいのちの中核として理解されるものである。

この「いのち」と「血」には、特別な関係が考えられている。「すべての肉の命 (נֶפֶשׁ) は、その血と一つ……。すべての肉の生命はその血だからである」(レビ 17₁₄)。

こうした理解から、動物を食する場合、その血は、命の源なる神に帰らなければならない。命を代表するがゆえに、祭壇に注がれる犠牲の動物の血は、命のあがないとなることのできるものであった(レビ 17₁₁)。

その他に「いのち(命)」と訳されているヘブル語は次のような名詞である。

חַיָּה (hāyāh) から派生した מִיְּחַיָּה (miḥyāh) (創世 45₅、士師 6₄)、「心」を表わす לֵב (lēb) (エレ 30₂₁)、および肉を意味する בָּשָׂר (bāšār) (エレ 12₁₂、32₂₇)。

さて、神のかたちをした命ある「人」が造られた。

聖書では人は、神の被造物であるという観点でとらえている。

אָדָם ('ādām) は、旧約聖書に 539 回使用され、一般に「人」(man) と訳されているが、女に対する男を意味することが多い(創世 2_{22,23,25}、3_{8,12,17,20,21})。

この場合には「男子」(伝道 7₂₈)、また「男」(出エ 13₁₃)と訳された個所もある。しかし集合名詞として「人」をさす場合が多く(創世 1₂₆, 6_{1,5}, 9_{5,6}, 申命 4₃₂他), この語が男女を含めていることは明らかである(創世 1₂₇, 5₁, 民数 5₆)。その意味から、この語を「人間」(man イザ 44₁₁, ハガ 1₁₁)、「全人類」[all mankind, חַ'אָדָם (hā'ādām) エレ 32₂₀]と訳されている。

人類の始祖の名「アダム」はこの意味をもっており、妻イブに対してはひとりの男性、人類に対してはその代表としての始祖である(創世 4₂₅, 5₁₋₅, I 代 1₁, ルカ 3₃₈, ロマ 5₁₄他)。またこの語にはいわゆる複数形がなく、集合名詞で表現されていることは、ヘブル人が人間存在を社会的な関連でとらえている面を示すものとして意味がある。

אִישׁ ('iš) は、旧約に 2,166 回使用され、一般に「人」(man)と訳されているが(創世 2_{23,24}, 4₁, 24₆₅, 出エ 11₃他), 「男」(創世 2₂₃, 19₈, 出エ 11₂, レビ 13₂₉, イザ 4₁), 「男子」(申命 17_{2,5}, エス 1₂₂) また「夫」(husband)とも訳され(創世 3_{6,16}, 16₃, 29₃₂, レビ 21_{3,7}, 民数 5₁₃, 士師 19₃, ルツ 1₃他), 性別による男子を意味している。

創世 2₂₃には「これに女 [אִשָּׁה ('iššāh)] という名をつけよう、このものは男 [אִישׁ ('iš)] から取られたのだから」という一連の語呂合わせを用いて、夫婦における理想的な関係を示そうとしている。

אָנֹשׁ ('enōš) は、一般に個人をさして「人」(man)と訳されるが(ヨブ 5₁₇, 13₉, 詩篇 9_{19,20}, イザ 13₇他), 多くの場合は集合名詞として「人々」(men)と訳されている(創世 6₄, 12₂₀, 13₁₃他)。

これは男性をさし、「男」(申命 31₁₂, エズ 10₁, エレ 18₂₁, 40₇)、また「夫」(husband)と訳されている(ルツ 1₁₁, エレ 44₁₉, エゼ 16₄₅)。なおこの語を אָנֹשׁ ('anāš) 「弱くなる」に関連される学者がいる。もしそうであるならば、セツが男の子を生んで「エノス」(弱い者)と名付け、「その頃人は ヤハウェの名を呼び始めた」(創世 4₂₆)という記述は深い意味を持つ。

人間の弱さの自覚、人間の限界性を知るところから、広大無限な神の慈悲と神の無限性への深い信頼が生れてくるという深い人生経験を反映しているからである。

関根訳の創世記には「からだ」という語は見当たらない。実際、われわれが日常使用している「からだ」に相当する語が、旧約時代に存在していないことは、第一報にも触れている。

口語訳聖書で「からだ」と訳されている語は 10 種類あるがそれらのうち内容的にみて最も重要な語は, בָּשָׂר (bāšār) である。ところが בָּשָׂר はもともと「肉」を意味し、ギリシャ語では, σάρξ とすべき語である(創世 2₂₃, 申命 12₁₅他)。260 個所を越える בָּשָׂר のうち、口語聖書で「からだ」と訳されているところは、きわめて少ない。

בָּשָׂר は口語聖書で、「からだ」の他、「一体」、「命ある者」、「近親の者」、「全身」、「肉」、「肉親」、「肉体」、「肉片」、「肉欲的」、「人」などと訳されている。

旧約に、魂と「からだ」の区別がないわけではない。しかし「からだ」は魂の完全な表現である。イスラエルの人々にとって、全体は常に個々の働きによって動くから、魂の活動にあずかる「からだ」の個々の部分や器官は、魂そのものである。

心も血も骨も内臓も頭も目も顔も、「からだ」の一部分でありながら、「からだ」そのものとして機能し、魂そのものとして働く。各部分が一つの命 [נֶפֶשׁ] (nepeš) ひとりの人を表現する。

「からだ」と肉、「からだ」と「からだ」の各部分とがこのように一体となって連帯して働くものとして把握されていたように、「からだ」が他の「からだ」から孤立して存在するかのようにみなされることもない。

父の家は一つの魂をかたちづくる、一つの「からだ」である。

ユダがヨセフを自分たちの נֶפֶשׁ と呼ぶとき、それが「肉親」の意味であり、兄弟のことであるのはいうまでもない (創世 37₂₇)。それはさらに、親類の人々をも含む (イザ 58₇)。

IV. 男と女に関する用語

9種類の用語が、のべ144回使用されていた。

男 おとこ אִישׁ ('ish), ἀνὴρ, Man (21回)

1₂₇ 2₂₃ 2₂₄ 5₁ 12₁₆ 17₁₀ 17₁₂ 17₁₄ 17₂₃ 17₂₇ 18₁₂ 19₅ 19₈ 19₉ 19₃₁
24₁₆ 34₁₄ 34₂₂ 34₂₄ 34₂₅ 34₃₁

女 おんな אִשָּׁה ('ishshāh), γυνή, Woman (43回)

1₂₇ 2₂₂ 2₂₃ 3₂ 3₄ 3₆ 3₁₂ 3₁₃ 3₁₃ 3₁₅ 3₁₅ 3₁₆ 5₁ 12₁₄ 12₁₅
12₁₆ 12₁₉ 14₁₆ 16₄ 16₅ 16₈ 16₉ 18₁₂ 20₃ 24₅ 24₈ 24₁₁ 24₃₇ 24₃₉ 24₄₄
27₄₆ 27₄₆ 27₄₆ 27₄₆ 28₁ 28₆ 28₈ 31₃₅ 33₅ 38₂₀ 38₂₀ 38₂₂ 38₂₃

月のもの אֶרֶץ נְשִׁים ('ōrah hannāsīm), The manner of women (2回)

18₁₁ (31₃₅)

石女 うまずめ אֶקָר ('āqār), Barren (2回)

11₃₀ 29₃₁

女の所へ入る שָׁכַב (shākab), (22回)

4₁ 4₁₇ 4₂₅ 16₂ 19₃₁ 19₃₂ 19₃₄ 29₂₁ 29₂₃ 29₃₀ 30₃ 30₄ 34₂ 38₂ 38₈
38₉ 38₁₆ 38₁₆ 38₁₆ 38₁₈ 38₂₆

身ごもる בָּטַן (beten), συλλαμβάνω, conceive (22回)

4₁ 4₁₇ 16₄ 16₄ 16₅ 16₁₁ 19₃₆ 21₂ 25₂₁ 29₃₂ 29₃₃ 29₃₅ 30₅ 30₇ 30₁₇
30₁₉ 30₂₃ 38₃ 38₄ 38₁₈ 38₂₄ 38₂₅

出産 しゅっさん יָלַד (yālād), γεννάω, Birth (11回)

3₁₆ 18₁₃ 20₁₇ 25₂₄ 29₃₂ 29₃₃ 29₃₅ 35₁₆ 35₁₆ 35₁₇ 38₂₇

割礼 かつれい מוּל (mûl), περιτομή, Circumcision (14回)

17₁₀ 17₁₂ 17₁₃ 17₁₄ 17₁₄ 17₂₆ 17₂₇ 21₄ 34₁₄ 34₁₅ 34₁₇ 34₂₂ 34₂₂ 34₂₄

陽の肉 ようのにく עֹרְלָה ('orlāh), Foreskin (7回)

17₁₁ 17₁₃ 17₁₄ 17₂₃ 17₂₄ 17₂₅ 34₂₄

アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフを中心に、11章以下は、イスラエルの族長時代が綴られている。族長伝承の歴史が語られ、各々の系図が示されている。それゆえ男と女の営みに関する記述も多い。

「女の所へ入る」、「妻を知る」は、性行為そのものを意味している。22回使用されているが、そのうちロトの娘たちは「この地には世の慣しのようにわたしたちの所に入る男の人はいないのです。……ともに寝て、お父さんによって子孫を得るようにしましょう」(19_{31,32})、そして「二人の息女はその父によって身ごもった」(19₃₇)。

民族の血の純血を誇る意味をもたせているものと思われる。しかしイスラエルでは後の法律も近親相姦を禁じている(レビ 18₆₋₁₈)。

また、ディナの物語(第34集)では、ディナがヒビ人モハルの子シケムによって辱められた記述がある。ヤコブの二人の息子は激怒し、たくらみを用いてモハルの町のすべての男子を殺し、すべてのものを略奪してしまった。「だってあの男がわれわれの妹を遊女のように扱うのを許しておけるものですか」(34₃₁)。

この時代に遊女が存在したとは驚きであるが、他にも「その顔を隠しているので遊女だと思い」(38₁₅)という記述もある。

さて妊娠してから月満ち、子供が生まれると、そこに居合せる隣家の経験ある婦人がへその緒を切り、水で洗い、塩をこすって消毒し、産布でぐるぐる巻きに赤ん坊を包んだ。なお産布は1 m 方形の丈夫な布地で、一端に長いベルトがついており、ミルトス(てんにんか)の乾かした葉を挽いて作った粉をつけてから産布に包むのである。

職業的産婦もいたが(創世 35₁₇, 38₂₈, 出エ 1₁₅)、普通は経験のある素人の婦人が助産した。

妊婦は、狭い間隔で置かれた二つの石の上にしゃがんで分娩した。分娩は助産婦または産を助ける婦人の膝に入るように行われた。そこから「ひざに置く」という表現は自分の子供にすることをさすようになった(創世 30₃, 50₂₃)。

イスラエルの婦人は産が軽かったようである(出エ 1₁₉)。しかし他面、生みの苦しみは女の宿命とされ(創世 3₁₆)、預言者はしばしば生みの苦しみを比喩的に引用している(イザ 13₈, 21₃, 66_{7,8}, エレ 4₃₁, 6₂₄)。

イスラエル民族は、男によって形作られてきた。

アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフの4人の人物を中心とする族長時代の系図は、男の歴史である。

ところが、「男」は、21回、これに対して「女」はその2倍の43回も使用されている。

イスラエル人の間では、女子は男子の下位にあって隷属的であった(創世 3₁₆)。しかし男子の補助者として男子と同格であるとの観念もあった(創世 2₁₆₋₂₄)。

婦人の家庭内における家事的労務は東西を問わず同じであるが、古代イスラエルにあっては、特に日毎のパンを作るためのうす挽きは婦人の重要な労務の一つであった。子供達に宗教上の真理を教えることもその務めの一つであった(箴言 1₈, 31₁, II テモ 3₁₅)。

初期には一夫多妻の風習も行われたが、後代に厳格な性の倫理から一夫一妻が要求された(マラ 2₁₄₋₁₆)。

妻は尊敬をもって語られ(箴言 5₁₈, 18₂₂, 31₁₀₋₁₂, 伝道 9₉), 母への尊敬, 母の教育の権威も認められていた(出エ 20₁₂, 箴言 1₈). 宗教においても婦人は男子と共に祭に出席し(Iサム 1₁-他), 彼等と共に供犠にあずかり(士師 13_{20,23}他), 神殿の合唱には彼等と共に歌った(エズ 2₆₅他).

聖書は女によって罪が世に入ったことを記すと共に(創世 3章), また女によって救いと生命が世に来たことも記し(ガラ 4₄), 深い救済の秘義を示している.

「女」と訳された主な原語は, まず נִשְׁאָה ('iššāh) で「柔らか, 繊細な」の意味で, 男子に対して女(創世 2_{22,23}), 夫に対して妻(創世 2_{24,25})をさす.

נְקִבָּה (nəqēbāh) は女性 (female) をさし, エレ 31₂₂のほかは, モーセ五書に限られている(創世 1₂₇, 5₂, レビ 15₃₃, 27_{4,5,6,7}, 民数 5₃, 31₁₅, 申命 4₆₆).

さて「男」と訳され, 最も多く用いられているのは אִישׁ ('iš) である. これは, 男女の対として(創世 2₂₃, 出エ 11₂, イザ 4₁他), 性関係の一方として(創世 19₈, 士師 11₃₉, 21₁₂)使用されている.

次いで多い זָכָר (zākār) は性別としての男性(レビ 27₃, II代 31₁₉, エレ 30₆他), 女と対に言及されて(創世 1₂₇, 民数 5₃, 申命 4₆₆), 人間をさす場合が多い.

גִּבּוֹר (geber) は女と対比するという時に限って使われている語である(出エ 10₁₁, 申命 22₅, 箴言 30₁₉他).

イスラエルの男性には割礼が義務づけられている.

「割礼」circumcision מִלָּה (mūlāh) は「切り取る」の意味で, 複数形で出エ 4₂₆に一か所だけ使用されている. 他は מִל (mūl) という動詞が用いられている(創世 17_{10,11}, 出エ 12₄₈, レビ 12₃, ヨシ 5₈).

割礼は, 陰茎の包皮を切開, もしくは一部を切り取る外科的手術で, イスラエル人には宗教的な意味を持っていた.

この儀式は, 神がアブラハムに命じられた時に始まるとされているが(創世 17₉₋₁₄), 火打ち石のナイフをもって行っている(出エ 4₂₅, ヨシ 5₂₋₇), この儀式の起源がきわめて古いことを示している.

イスラエルの近接民の間にも広く行われていた(エレ 9_{25,26}). ペリシテ人は「割礼を受けない者」として不浄視された(士師 15₁₈, Iサム 14₆, 17₃₆).

またイスラエル人が捕囚として移されたアッシリア, バビロニア地の住民は割礼の習慣を持っていなかった. この事実から捕囚の地でのイスラエル人は割礼を選民の記号として重視するようになり, この時代以降ユダヤ人にとって割礼は重要な儀式となった.

男子は生後 8 日目に割礼を受け, イスラエル人たる資格を得た(創世 17₁₂, レビ 12₃, ルカ 1₅₉, 2₂₁, ピリ 3₅).

む す び

創世記は天地万物の創造の記事からはじまる. ついで「神の像(かたち)」Imago Dei として, 「人」の創造の記事が述べられている. この Imago Dei は, 聖書の人間観の根本

をなす概念である。すなわち、「人」は他の被造物のように直接態において神の現わすべきものではなく、神との関わりにおいて、神の栄光の「反射鏡」であるべきものである。

創世記の中からこの魂のある「人」と、その担い手である「からだ」に関する語句を拾い上げてゆくその過程において、著者らは、遠くヘブライ人の思想の深淵さとその永遠性との、限らない希望と慰めとが与えられたことを記して筆を擱く。

なお、ヘブライ語、ギリシャ語の母字は平沢所有のものを使用した。

参考文献

- 1) BIBURIA HEBRAIKA : Edited by RUDOLF KITTEL (1937)
- 2) 旧約聖書：日本聖書協会 (1956)
- 3) The New English Bible (1970)
- 4) 聖書語句大辞典：教文館 (1959)
- 5) 新聖書大辞典：キリスト新聞社 (1971)
- 6) 関根正雄：創世記，岩波文庫 (1964)
- 7) J. Robinson : The Body, p 11, n.2 (1952)
- 8) 真方敬道：古代思想にあらわれたひとと体，聖書とその周辺，伊藤節書房，251-271 (1959)
- 9) 平沢彌一郎：聖書を読む，論創社 (1987)
- 10) 平沢彌一郎，臼井永男：古典の中の人と体 (1) — 詩篇の中から —，放送大学研究年報，5 : 91-113 (1987)

(昭和 63 年 12 月 23 日受理)